

第16回 日本免震構造協会賞 -2015-

第16回日本免震構造協会賞は、右の7件に決定した。

表彰制度の目的

免震構造の技術の進歩及び適正な普及発展に貢献した者並びに建築物を表彰することにより、免震技術の確実な発展と安全で良質な建築物等の整備に貢献していくことが本協会の表彰制度の目的である。

表彰の対象

功労賞は、多年にわたり免震構造等の適正な普及発展に功績が顕著な個人に、技術賞は、免震建築物等の設計・施工及びこれらに係る装置等に関する技術としての優れた成果を上げた個人、法人及び団体に、作品賞は、免震構造等の特質を反映した優れた建築物の実現に携わった個人、法人及び団体に、普及賞は、免震建築物・免震啓発活動・免震に係わる装置等により免震構造等の普及に貢献した個人、法人及び団体に贈る。

表 彰

2015年6月11日
一般社団法人日本免震構造協会通常総会後

一般社団法人日本免震構造協会表彰委員会委員

川口健一(委員長) 安達 洋 丑場英温
篠崎 淳 細澤 治 真部保良 森高英夫
渡邊眞理

審査経過

本年度の応募件数と授賞数は以下ようになった。

技術賞2件応募 → 2件授賞
作品賞11件応募 → 4件授賞
普及賞4件応募 → 1件授賞

まず、第1回委員会では審議の結果、技術賞は全件ヒアリング、作品賞は全件を現地審査とした。本年より、大規模な作品(概ね10,000m²以上)の現地審査時間を必要に応じて30分増やすこととした。このため、さらに丹念に審査を行えるようになったことは、大きな改善点であった。普及賞は、作品賞の現地審査の折に、意見交換を頻繁に行って、審議を深めた。

技術賞は両件とも、応答変形の大小を意識したパッシブ型のダンパーの開発である。東日本大震災で経験した、長時間、長周期の地震がもたらす過大な変形を比較的安価な方法で対策する、という点が共通している。鋼製弾塑性ダンパーは既存建物の改修に応用し施工上の問題も経験克服している点が評価された。切替型オイルダンパーは、構成が簡易な点、実証棟へ適用している点、既存免震への適用の可能性がある点などが評価された。

本年の作品賞エントリーにはいわゆる制振構造が少なかったが、建築的には特長のある作品が多く、現地審査時には建築計画的な観点も加えた様々な視点からの質問や、やり取りが活発になされた。内訳は、病院建築群の免震改築2件、複合再開発ビル1件、オフィス系ビル5件、集合住宅1件、市庁舎1件、チャペル1件であり、規模も様々であった。免震・制振技術が普及、成熟していく中で、これらの

選 考 結 果

第16回日本免震構造協会賞受賞は下記の7件である。

I 技術賞

1) 変形を制限した鋼製弾塑性ダンパーによる鉄骨梁の損傷低減工法の開発

鹿島建設株式会社 黒川泰嗣 瀧 正哉
澤本佳和 岡安隆史
株式会社小堀鐸二研究所 鈴木芳隆

2) パッシブ切替型オイルダンパーの実用化と都市型小変位免震建物の実現

大成建設株式会社 水谷太郎 欄木龍大
長島一郎 青野英志
カヤバシステムマシナリー株式会社 露木保男

II 作品賞

1) キューピー株式会社 仙川キューポート

キューピー株式会社 長谷部敏朗
株式会社日建設 小板橋裕一 柳原雅直
大成建設株式会社 喜田浩司

2) 岸本ビル

株式会社竹中工務店 岡田光博 森下泰成
須賀定邦 林 茂史
阿倍野センタービル株式会社 大橋千恵子

3) ガーデニエール砧 WEST

清水建設株式会社 高橋 啓 井川博英
小嶋一輝 鷺見晴彦
大作和己

4) Ribbon Chapel

NAP 建築設計事務所 中村拓志
Arup 柴田育秀 伊藤潤一郎
ピーエス三菱 檜垣 清

III 普及賞

1) 減災館における学習・体感・研究を通じた免震技術の普及・啓発

(敬称略)

技術を採用することで生まれる余裕度をどのように建築的に活かしていくかが、やはり審査のポイントとなった。

免震・制振技術が本来もっている安全安心な感覚。同時にこれらの余裕代を使うことで初めて可能になる建築デザイン。これがどこで折り合うか、というバランス感は重要な構造デザインの問題でもある。数値計算やその他のデバイスに依存しすぎた設計は、それらの一つ、あるいは複数が期待通りに機能しなかった場合を想像すると大きな不安を生む。免震・制振技術で生まれた余裕代が、劣化した構造計画で使い切ってしまうと、そこには本来これらの技術が持っていた格段の安全性が感じられなくなってしまうのである。今回の4作品の選定過程には各審査委員のこのような意味での完成度を問う感覚が動いていたと感じている。

普及賞には15周年記念委員会で作成した当協会独自のチャートがあり、これに合致するかどうかを審査委員会で判断している。本年は名古屋大学減災連携研究センターの免震啓発活動(福和伸夫教授センター長)が選ばれた。

本年も作品賞をはじめとして、多くの優れた業績の応募があった。次回以降も多数の応募を期待したい。

(川口健一)